

「ヴィクトール?!」

「いいから。ほら、美味しいんですよ。舐めてなっ」

「あ……ん、んん……」

飢えには抗えない。セラは無意識のうちに、またヴィクトールの性器を咥え直していた。

とはいえ、彼の手は尻のあたりで妙な動きをしている。尻尾の付け根をやたらと撫でてくるのは、人外種専攻であるがゆえに、インキュバスの身体的特徴が気になって仕方ないのだろうか。

ぬるりと、その指が尻の割れ目を滑る。さきほどこぼされた液体が、くちゆりと湿った音を立てた。

（それにしても……やっぱり、ヴィクトールの精気はなんて美味しいんだ。もっと、先っぽから甘いので、出てこないかな……）

ちゅるちゅると、下で先端を舐めていた、その時――

――クチツ。

「んぐっ?!」

突然、後孔に走る違和感。セラは思わず、びっくりと肩を跳ねさせた。

「あっ、あっ、ヴィクトール！ なにしてるの？ なんで、僕のお尻に……んっ！」

「いいから、ちゃんと口を動かせ。じゃないと美味しいの、出てこないぞ？」

「あっ、あうう……んぐう……！」

ヴィクトールの指が、セラの後孔の中に入り込んでいる。しかも、さきほどこぼされたところとした粘液のせいで、ぐちゃぐちゃと中をかき回すような音までしていた。変な感覚だ。けれど、それよりも、この空腹を満たす『食事』が優先だった。思わず腰がぴくりと揺れてしまうが、セラは必死にヴィクトールのそれに吸いつく。

——ちゅうっ、ちゅくっ、ちゅくっ、じゅるっ。

唾液を絡めて吸い上げる。気持ちいい刺激を与えれば、ヴィクトールはここから『美味しい蜜』を出してくれる。だから、セラは必死だった。けれど、その動きに合わせるみたい、ヴィクトールの指は——クチクチ、と中を弄り続けてくる。

「んっ、んうっ……ヴィクトール、もっと白いの出して……♡ 美味しいの……♡ 食べたい……♡ あ、あうっ……!」

ぐり、と指先が動く。いつの間にか二本に増やされていたヴィクトールの指が、ある一点を突いた瞬間、息が止まるような、びりっとした感覚が走り、セラの腰が大きく跳ねた。

「ああ、ここ？　なるほどな。少し、触り心地が違う」

「んっ、んんんっ……」

いじられるたびに、びくびくと腰が跳ねる。それでも、セラの意識はヴィクトールの性器

に釘付けだ。舌で裏筋を撫でる。

——チュパツ、チュパツ、と吸い上げると、どくん、と内側の脈動が伝わってきた。

——クチクチクチクチ。

「んっ……んんっ……」

指は容赦なく、同じところを責め続けてくる。だめだ。なにか、変なものが込み上げてくる。目の前の『食事』に集中したいのに、どうしても落ち着かない。体をくねらせると、それを止めるように、ヴィクトールの手が腰を押さえつけた。

「ん……んんんっ……んはっ……！」

——ビクンッ！

大きく体が跳ね、その拍子に、セラは口を離してしまう。

——ビュルルル！

その瞬間、先端から白濁が溢れ、顔に生温かいものがかった。

がくん、とセラはベッドに崩れ落ちる。お尻の奥をいじられて、まだお腹の奥がびりびりしているけれど、そんなことより、やっぱり今は『食事』が優先だ。

「あ、あ……こぼしちゃったあ……！」

顔についたヴィクトールの性液を、手のひらですくって舐め取る。

「甘い……美味しい……はあ……」

うっとり呟くセラを、ヴィクトールが仰向けにして、観察するように覗き込んでくる。

「インキュバス……なかなかエロいな」

「んえっ？」

「セラ、それで足りるのか？ もっとほしい？」

「ん……ん……足りない。もっとほしい……」

ふっ、とヴィクトールの口角が上がった。

次の瞬間、仰向けのセラは膝裏に手を入れられ、脚を持ち上げられる。ひっくり返ったカエルみたいな格好になるが、そんなことはどうでもいい。セラは、まだ顔に残る性液を舐め取るのに夢中だった。

「んっ、んんっ……ヴィクトール……なんで、さっきから僕のお尻、いじるの……？」

「俺は、痛いのは嫌だって言っただろ？」

「う、うん……そうだけど……」

それと、何の関係があるのだろう。

セラは、ぼんやりとそんなことを考えた。

「ああ、セラは、お尻弄られて気持ちいいのか？　それとも、インキュバスだから、俺の性液飲んで興奮してる？」

「んっ……あっ……んんっ……?」

「だってほら、セラのちんこ、勃ってるから」

「んえっ? あっ、ほ、本当だ……っ。んんっ、ヴィクトール、そこ押すのやめてっ……  
そこ、びくってなる……」

これまで感じたことのない刺激に戸惑い、セラは思わずシートに手をついて身を引いた。  
けれど、すぐに腰を押さえられて逃げ場を失う。

「こら。主導権は俺だって言ったよな。逃げるな」

「んっ、んんっ……♡ でも……だって……♡」

「ほら、ちんこも触ってあげる」

「ん……んあっ……♡」

——チュクチュクチュクチュク。

ヴィクトールは後ろをいじりながら、もう一方の手でセラの性器を包み、上下に扱いてくる。両側からの刺激に、セラは身悶えするけれど、逃げるなど言われている以上、耐えるしかない。

どれもこれも、ご馳走のためだ。

ふと、考える。男の人とのエッチって、どうやってするんだろう。女の子と違って、孔は一つしかないから、そこに入れるしかないはずだ。でも、ヴィクトールは痛いのは嫌だと言っていた。

「ヴィクトール……」

「ん？」

「あんっ……あっ……あんまり、僕のちんこ大きくすると……ヴィクトールが、痛い思いするかも……」



せつかく気を遣ったつもりだったのに、ヴィクトールはセラの言葉を「はっ」と笑い飛ばした。

「セラは、ちんこ使うつもりなんだ？」

「んっ♡ う、うんっ、使う、使うよっ……あっ♡ だって、ヴィクトールとエッチするんだもん♡」

「なるほどな。じゃあ俺とエッチする前に、射精しちやまずいよなあ？」

「う、うんっ……」

確かに、その通りかもしれない。

なのにヴィクトールは、まだ——クチクチ、とセラの性器を扱き続けている。

「ヴィクトール……出ちゃうから……触らないで……もう……」

「あー、そうだな。じゃあ、セラが勝手に出さないように……」

ふっと、ヴィクトールの手がセラの性器から離れる。それと同時に、尻を弄っていた指も抜けた。

ほっとしたような、少し名残惜しいような、よくわからない感覚のまま、次に、ヴィクトールが手にしたものを見て、セラは荒れていた呼吸を整えながら首を傾げる。

「ひ、ひも……？」

細い革紐のように見える。

ヴィクトールはそれを手に取り、セラの下半身へと手を伸ばした。

「あっ？ えっ？！」

セラは性器を握られ、本能的に身を振る。嫌な予感がしたのだ。

けれど、ぎゅっと握り込まれて、抵抗できない。

「約束、守って。主導権は俺。勝手なことしない。したらお仕置き」